

おらほノ魂

特集 第8回

生保内地域

生保内の地名は、アイヌ語の「オポ
ンナイ」【深く小さい沢または霜多い沢】
が語源であるとの説もあります。
水源豊かな地域は、隣県岩手県と接
する地域でもあり、交通交流の要とし
て発展してきました。
その豊かな地域の魅力を、探してい
きます。



交流がもたらすもの

仙岩峠を越えて道路が整備され、
鉄道が開通するようになり、自然豊
かな観光地を多く抱える田沢湖、歴
史ある角館などの玄関として、生保
内の地域も活性化していきます。

仙岩峠 交通の要所として
かつて秋田側と岩手側との交通交
易は、古く国境の国見峠を越えて交
わされ、この峠道は重要な街道と
なっていました。現在の仙岩トンネ
ルなどで、二つの県をつないでいる
仙岩峠の国道46号線に至るまで、国
見峠、仙岩峠も交通手段の移り変わ
りと共に変化してきました。大昔の
峠道は不明ながらも「人馬で通った
江戸時代の道」「荷馬車などの明治
の道」「車の時代の峠道」そして現
在の仙岩道路が確認できると言いま
す。



助小屋（おたすけこや）
「助小屋」は峠の休憩所や避難先
として立てられた簡単な山小屋。秋
田、盛岡両藩の緩衝地帯となる稜線
上にあつたため、助小屋へは秋田側
からも盛岡側からも自由に行くこと
ができました。
藩境の緩衝地帯であるこの特性を
持つ助小屋を利用し、ふもとの生保
内と雫石の人々はお互いに荷物を持
ち寄り、無人交易を行っていたと記
されています。人々の信頼により無
人の交易場所で荷物が盗まれること
はなかったと伝えられます。

振り返る出来事

明治8年 秋田岩手両県が峠路の改
修に着手、同9年に仙岩
峠の名称が公示された
※命名者は視察に訪れた内務卿大久
保利通とも言われている
大正15年 国鉄生保内線が大曲生保
内間開通
昭和15年 生保内発電所完成
昭和35年 生保内地区集中豪雨。死
者行方不明者15人、家屋
流出25戸の他にも大きな
被害が出る
昭和39年 国道46号開通。観光客数
も急増
昭和41年 田沢湖線開通（大曲盛岡
間）
昭和45年 9月に駒ヶ岳噴火（38年
ぶり）
昭和51年 仙岩トンネル開通。冬期
間の通行不能も解消し、
交通量も飛躍的にアップ
平成2年 玉川ダム完成
平成9年 秋田新幹線開通



昭和41年 田沢湖線全線開通



昭和38年 仙岩トンネル起工式



昭和32年 生保内駅落成



昭和51年 国道46号仙岩道路開通



昭和35年 田沢湖水害（生保内川の氾濫）

関所跡

秋田藩が国境の生保内村に関所を
設け、通行人や物資の検問に当たっ
たと記録にあります。検守に当たっ
たのは高階因獄（たかしなひとや）。
以降高階家が代々役職を務めたこと
あります。現在、田沢湖交番の敷地内
に「生保内関所跡」の碑があり、昔
の名残を伝えます。



一里塚

一里塚は徳川幕府二代将軍秀忠が
各藩に作らせたもの。旅人の目的地
までの道のりの目印にと作られまし
た。一里塚は六郷から角館まで6カ
所、白岩街道に3カ所、田沢湖には
7カ所あったとされ、六枚沢にある
「土のぼつと一里塚」は元のまま残っ
ている貴重な一里塚です。

地域のふれ合いで学ぶ

感謝・思いやり・おもてなし

生保内小学校
(田口賢治校長)

生保内小学校教頭時代、築田謙一郎先生は、碧洋伊藤東一郎氏作「駒草は雲を吸い雲を吐く花ならむ」の句に触発され、現在の校章を創案したと言われています。

駒草は、高山の砂礫といった厳しい環境に根を深く伸ばし、美しい花を咲かせます。雪の多さや「だし」といったこの地に育ち、子どもたちにもりっぱに成長してもらいたいとの願いが伝わってきます。

地域のサポート

その思いは、親や先生だけでなく、地域の人にも伝わり授業のサポートも積極的にに行われています。ミシンやスキーの授業のほか、運動会で行



▲ミシンの授業を地域ボランティアがサポート

う生保内節の踊りでは、演奏をしたり踊りの指導は地域ボランティアの方々に手伝ってもらっています。ボランティアの方も「子どもから元気をもらった」と、互いに支え合っていることは子どもたちも自覚し、卒業を間近にした6年生からは、「お世話になった地域の人たちにお礼の手紙を書きたい」との声も。地域に対する感謝の気持ちが育っています。

放課後には毎日、たざわ湖防犯巡回隊が子どもたちの安全を見守っています。地域に支えられ、守られていることは子どもたちも自覚し、卒業を間近にした6年生からは、「お世話になった地域の人たちにお礼の手紙を書きたい」との声も。地域に対する感謝の気持ちが育っています。



▲生演奏で気持ちよく生保内節を披露



▲学習発表会（生小ドリームフェスタ）で秋田県を組体操で表現



▲茶道を通じておもてなしの心も学びます



▲「なべっこ」は1つの班に各学年1人ずつの縦割り編成。高学年が下の学年の面倒を見ます

地域への恩返しとして

運動会や学習発表会ときには、地域の方にも見に来てもらえるようお知らせし、感謝の気持ちを込め、がんばっている姿を見てもらっています。

受け継がれる思いやり

「登校すると6年生を中心に進んで玄関前を除雪しているんです」生保内小学校に赴任した先生たちはみなこの光景に驚くと言います。遊びたい盛り子どもたちが、自主的にみんなのために力を合わせて働く姿には、確かな心の成長が感じられます。

6年生の姿を見てその下の学年も自覚が芽生え、自然とこのような姿は、伝統として受け継がれていきます。



▲雪の朝、自主的に除雪する子どもたち

生保内地域運営体



会長◆佐藤善昭さん

農村部もあり、住宅地や観光地でもある生保内地域。昨年1月29日の生保内地域運営体設立総会からちょうど1年が経ちました。「範囲が広く人々も多かったので心配もあったが、それでも説明会から設立までが早かったのは各地域の会長をはじめ皆さんの尽力があったから」と佐藤会長。事務局のサポート、各地域会長、地域の協力で次年度以降も継続していく手配



稲わら松明を手に練り歩く子どもたち

生保内地区に伝わる小正月行事「なるか」は五穀豊穡を祈願する虫追い行事。ホラ貝、太鼓の伴奏に合わせて「なるか、なるか」と唄いながら田んぼを練り歩きます。火のついた稲わら松明を持ち、害虫を追いつくをします。30年くらい前までは各集落で行われてきた行事ですが、一時期完全になくなるものの、その後有志が集まって地域の学校の協力のもと開催にこぎつけました。今年は2月6日に行われます。

今に伝わる風習文化



地域に伝わる大切な文化
田植え踊り（市指定無形民俗文化財）



石神会館前に立つ記念のモニュメント

石神地区に伝わる田植え踊り（市指定無形民俗文化財）は県内に唯一の田植え踊りと言われています。田植え作業の仕事をユーモラスに演じるこの踊りは、南部（岩手県）との交流から伝わり踊られたとされ、いつしか踊りは特色を増し、南部に伝わる踊りとはまた別の、石神地区独自の踊りとなっていきました。

また同地区には同じく市指定無形民俗文化財に指定されている石神番楽などがあり、芸能の盛んな地区となっています。

生保内地域運営体

平成23年度の事業概略

環境整備事業

- クニマスPR看板設置事業
- 桜の植栽事業
- 地域案内標識設置事業
- 安情の滝環境整備事業

安心・安全対策事業

- AED設置事業

文化・スポーツ振興事業

- 伝統芸能・行事保存事業
- 地域住民参加型の駒ヶ岳登山事業
- 生きがい対策事業
- 敬老会開催事業